

野上浩生全集

第十九卷

岩波書店

野上彌生子全集 第十九卷

第九回配本(全二十三卷)

一九八一年二月六日 発行

定価 三五〇〇円

著 者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発行者 緑 川 亨

発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目十五

電話 〇三―二五五―四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上彌生子 1981

目 次

ラガド大学参観記補遺	三
夏目先生の思ひ出	八
青葉のたより	一八
春 昼	二七
緑蔭煮茗	三四
山 草	四一
女性への言葉	四六
作家のつとめ	四八
叢 林	五二
〔「叢林」拾遺〕	五四

断片	八〇
若い友へ	八四
寺田さんのこと	九三
世阿弥の言葉	一〇三
ローマへ旅立つ息子に	一〇八
現代日本の記念塔	一一〇
旅立つ子に	一二二
矢か弾丸か	一二三
五六年後の彼の故国を	一二八
私の憂ひ 私の喜び	一二九
若き友への手紙	一三〇
入学試験を例として	一三五
一つのねぎごと	一三七
せめて一本の樹に	一三八

目 次

『東京朝日新聞』紙上相談	一四二
一本の樹	一五七
美しき泥土	二六五
現代を後世に訴へるもの	二七三
山 居	二七六
熊野松風に米の飯	二九〇
秋ふたたび	二九一
成 長	二九五
「女の一生」を読んで	二九七
噂	三〇一
他生の縁	三〇五
やまびとのたより	三一
神のみぞ知る	三七
古いお友達	三八

米国へ国民使節 市河晴子夫人	三一九
奈良	三二一
京の夢	三二七
若き友へ	三三一
浅春記	三四〇
先生であり友達であつた良人	三四七
花束の代りに	三四九
『ホトトギス』五百号記念集	三五七
小庭	三五八
たより	三六四
日本の女性	三七三
支那にゐる人へ	三七五
欧洲だより	三九一
国際愛も賑やかにパリを去る邦人	三九四

夫と妻	三九六
ふるさと断章	四〇九
秋	四二二
断章	四二三
フランスの一片	四四九
『輝ク』宛書簡	四五四
奈良に住む友へ	四六〇
ただ子供たちを	四六四
その頃の思ひ出	四六六
カナリヤ	四八二
夏のお友だち	四八七
後記	四九一

評論・隨筆
二

ラガド大学参観記補遺

辛辣な諷刺で当時の英国人を震ひあがらしたスウィフトの『ガリヴァ旅行記』は、現在流布されてゐるものが完本ではなく、発表の際、世評を慮つて省略された箇所があるらしいことは、スウィフト研究者がかねて唱へてゐたところであつたが、最近ロンドンの或る蒐集家の手におちた古い原稿の中に、たしかにスウィフトの『ガリヴァ旅行記』の一部に相違ないと推定されるものが発見されたことを、近著の一英文雑誌は報じてゐる。その原稿には彼が愛人ステラへ書いてそのまま出なかつたらしい二三通の手紙も交つてゐるので、学問的な興味とはまた別の意味から一般の強い好奇心をそそつてゐるやうであるが、わたしにはその手紙以上におもしろく感じた数章の原稿があつた。それはガリヴァがラピュタと呼ばれる飛び島の首都なるラガドの大学を参観した時の、あの有名な記事の補遺とも称すべきものである。丁度『中央公論』記者から大学問題に就いてなにか書くことを求められてゐたので、夫から少しばかり訳出することゝ責を果たしたいと思ふ。

普通の流布本でも、この大学の参観記は人間の知的生活や、学問の方法に深刻な皮肉を浴びせかけてゐる点で『小人国』や『大人国』の記事に劣らぬ特色をもつてゐることは世人の知つてゐる通りで

あるが、この新たに見出された数章は、人間の排泄物から原形の食物を取り戻さうとする実験や、エイカに六百頭の豚を追ひこみ、それで土地を耕すと共に肥料を施す方法や、また口や舌を使はないで物品を示してそれで話しあふことで、一種の世界語たらしめようとする人工的対話法や、薄いウエイファに数学の問題と解説を丁幾剤^{ちんきざい}で書きつけて、空腹の時それを嚙み下し、三日間パンと水だけで辛抱してゐると、その丁幾剤が頭に上つて行つて、印刷したやうにはつきり解説が頭蓋骨の内面に現れるといふ（尤も大部分の学生は禁慾を守らないため、折角の藥が無効にするが）数学の教授法などを見聞してゐる章に、すぐ接続するもののやうである。

『この珍奇な数学教室を出ると、案内人は、銀杏の立派な並樹や、東洋風の幽邃な池や、低い灌木にふち取られた散歩路などのある美しい校庭を横ぎつて、チョコレイト色の大きな煉瓦の建物に今度私を導いた。そこは経済学の教室で、一人の禿げ頭の教授が貝殻本位論に就いて講義してゐた。これは人間が金銭を支配する代りに、金銭から支配されてゐる経済機構の矛盾を、根本から改善しようとする彼の新説で、従来の金本位及び銀本位を撤廃し、原始民族間に行はれてゐた例に倣つて、貝殻を通貨とすべきだと主張するのであつた。老教授の講義はすでに各論に入つて、如何なる貝殻が通貨として適當であるかを実証するために、各種の貝殻が生物学の標本室の如く壁に並べられてあつた。案内人は、この老教授の説には政府も深大の期待をかけ、なほ多種の貝殻を採集するために遠く海洋の島島にまで軍艦を派遣することを許してゐるとのことであつた。私はそれまでの便宜を得て自分の

研究を進めることの出来る老教授を羨望したが、同時に学生がその尊敬すべき講義に対してひどく冷淡な態度を示してゐるのを見遁すことは出来なかつた。彼らの多くはたしかにノートに取るやうな風を装ひつつ、語学や、その他の書物を勉強してゐた。否、私は一層驚くべき光景を見た。ベルが鳴つて教室から出て来た学生たちは、耳垢をほじるやうに指を耳に突つこんで詰めてあつた綿を引つ張り出すと、それを丁寧にポケットに仕舞ひ込んだ。恐らく聴きたくはないが、出席だけはしなければならぬ他の講義にもう一度役立たせるために。――

案内人は、私の注意を引いたものに就いて私が質問するまへに、自分から説明してくれた。それによると、学生は老教授の貝殻本位論は卓見ではあるが、その前にまだ研究すべき多くのことが残されてある。例へば金本位にしても銀本位にしても、それによつて組み立てられた経済機構の矛盾や欠陥を、徹底的に研究した上でなければ容易に捨つべきではないといふ意見を一般的に持つてゐる。この議論は三四年前が最も盛んで、その頃には『貝殻本位論排撃』とか『研究の自由を獲得せよ』とかのスローガンを大書した……を教室の高い窓から垂らし、その下でよく学生大会を開いたものであるが、しかしラピュタ王国の法律はこれらの集会を厳禁してあるので、それを聞く一隊の警官が、不穩の学生を捕縛するために大学に向つて行進して来る。一方また学生群は警官隊が大学のすぐ裏側になつた屯所から教室に達するまでには、駈足でも約二十分を要するのを知つてゐるので、それまでには敏速に解散したが、しかし、なにかの原因で時間が遅れると、この美しい大学の校庭が警官隊と学生群の

格闘場に一変する。さうして結局十数人の、多い時には五六十人の学生らが、殴られたり、蹴られたりした末に、そのために用意されて来た大きな荷車に石ころのやうに投げ込まれて連れ去られた。

——この説明は、人糞の復原研究や数学のウェイファ式教授法以上に私を驚かした。（諸君は牛津のモドレン・カレッジが、警官隊に包囲される光景を想像し得るだらうか。）殊に、法律によるとはいへ、自分の親愛な学生らが、いはば若い研究心から出発した行為のために、それまでの迫害に曝らされる現場を傍観しなければならぬ多くの教授諸氏の苦痛と悲しみを思ふと、私は衷心から同情に打たれた。しかし国法のためには私情を捨てるころの鍛錬を教授たちは常にしてゐるので、その苦悶にもどうにか堪へて行けたらしい、と案内人は語った。

現在では耳に綿を詰め込む位で、当時ほどの活潑な運動はないが、どちらにしても指導教授の説に反対するやうな行動は、師弟の情誼に悖り、青年の徳操の頹廃を示すものだから、大いに徳育を鼓吹すべきだといふ意見で、ラガド大学特有の新機軸による徳育教室が最近設立されたとのことである。案内人は、明日はそこへ連れて行かうと云つてゐるので、まだ見ない先から私は激しい興味に捕はれてゐる。』

この徳育教室の参観記はスウィフトの愛読者を十分満足させるに足るものであるが、ギリシア語やラテン語が飛びだして、病後の日向ぼつこの仕事には荷が勝ちすぎるのと、与へられた紙数も超過し

たので、残念ながら割愛して、また他の機会に紹介して見たいと思つてゐる。

——昭和十一年三月——

夏目先生の思ひ出

——修善寺にて——

先生のことは、一高の時から教はつてゐた野上にたえず噂を聞いてゐたので、まだ書いたものを見て頂かないまへから、わたしにも先生のやうな気がしてゐた。はじめて見て頂いたのは『縁』^{えにし}と云ふ、その頃『ほととぎす』を中心としてはやつてゐた写生文風の短いものであつたが先生はそれを褒めて下すつたので、虚子さんが雑誌に載せてくれた。云はばこれがわたしのささやかな文壇的デビューになつたわけである。しかしわたしには文壇への野心といふやうなものは少かつた。わたしはただその後もなにか出来ると見て頂いてゐた先生から、これでよいと云はれることが最上の名誉であり、満足であつた。同時に世間からどんなに喝采されようとも、先生に否定されるやうなものなら恥かしいと思つた。そんなものは決して書いてはならない。況んや金のために。——わたしは自分でどうしても書きたいと思ふものでなかつたら、一行も書くまいとさへ決心してゐた。今の若い人達是不思議がるかも知れないやうな、この窮屈な潔癖がつねにわたしを支配してゐたのは、読んで頂く人として先生をいつも一番に頭に入れてゐたからであつた。

今から考へると、先生もあの忙しいお仕事の中で、わたしの書いたものなぞよくこそ目を通して下さつた、とほんとうに有り難い気がするのであるが、それでわたしはお礼の顔出しをすると云ふやうなことさへしなかつたのであつた。なにか新らしいものが出来ると、木曜会の時に野上がもつて行つてくれた。わたしはあれほどいろいろな人を引きつけてゐた木曜日の会に一度も行かうとはしなかつた。行つて見たい気が時にはしないこともなかつたが、行つて自分のやうなものがなにを話すことがあらう、と考へると恥かしく気がひけた。これはほかの対人関係においても、わたしがいつも感じさせられる田舎ものらしい臆病で、それが先生の場合には一そう強くわたしを縛りつけたのであつた。それに、当時の先生は訪問客にはうんざりしてゐられることを知つてゐたので、わたしまで出かけてその上先生を疲れせなくとも、そんな暇に書物の一ページも読んだり、子供の世話でもよくしてやれば、先生にはその方がお氣に入るのだと信じてゐた。ひとつは野上から木曜会の度に、今夜は誰がどんな話をしてどんな議論が出て、また先生がどう仰しやつたと云ふやうなことまで委しく聞かされたので、行かなくとも大抵の話題や、出来事は知つてゐた。そんな事情で、あれほど長いあひだ親切にして頂いた先生に、わたしは五六度とはお目にかからなかつたやうな気がする。またお目にかかつて、書いたものの話などはわたしは一度もしたことはなかつた。そんなことを事事しく口にするのがなにか恥かしく、黙つてゐても先生にはこちらでわかつて貰ひたいと思ふことはわかつてゐてくれるのだと云ふ氣がしてゐた。だから殆んどだんまりで、時時、ぽつん、ぽつんとなにか云つて見て、腋